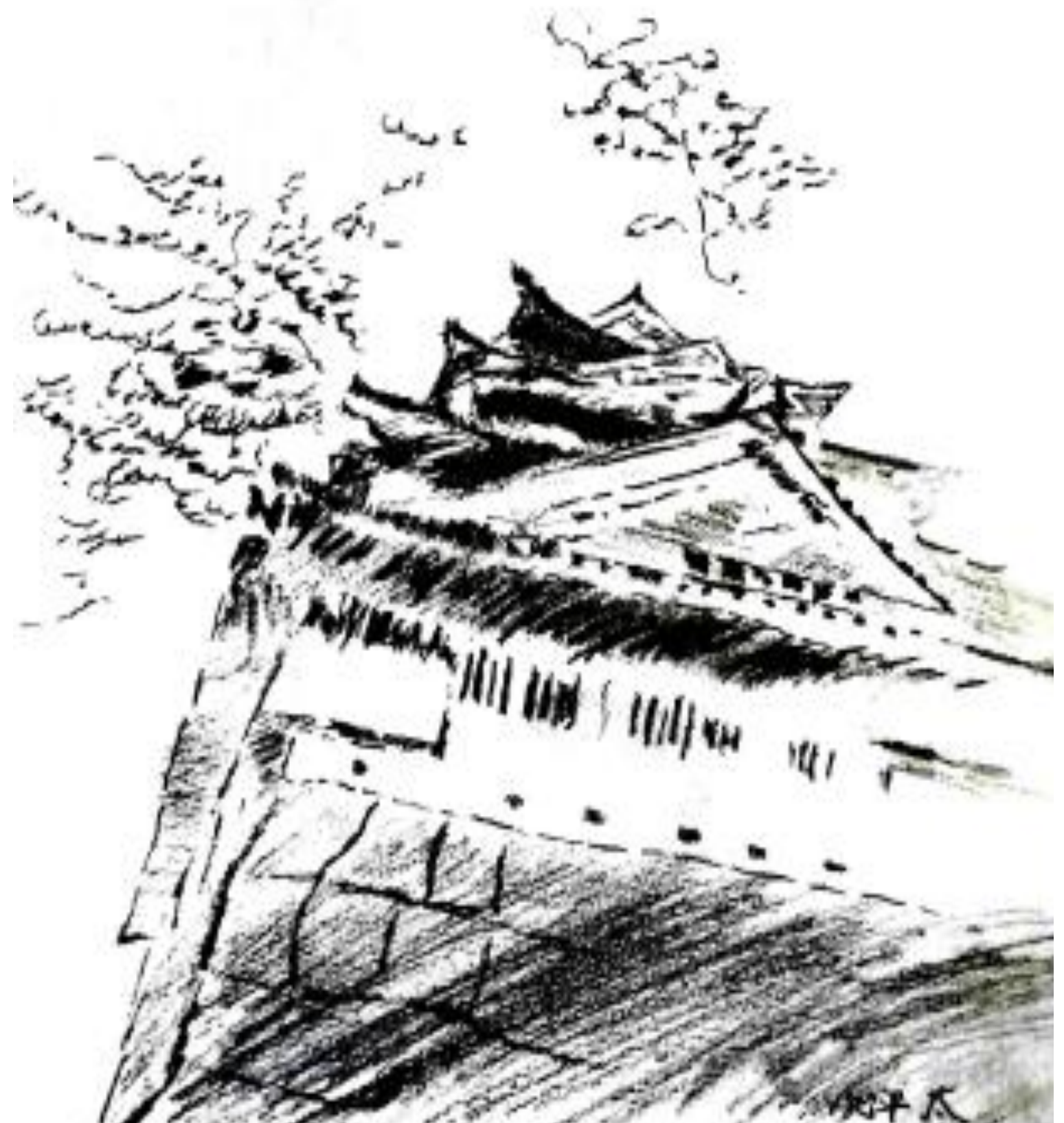


閣守天柳川

2026年01月号



第32回例会 2025年12月15日(月) 投句締切分

お題 「パーティー」

信子 選

政治家のパーティー券に闇がある
栄一が飛んでるパーティー年の暮れ
大台ヶ原から伊勢へ3人踏破
星影のワルツで締める懇親会
披露宴笑顔弾ける新夫婦

一品持ち寄りママ友のパーティー

幹事役花見 月見に雪見まで

寄り合いも十年経つという酒席

パーティーで乾杯前に薬飲み

ほか弁で老人会のクリスマス

百歳を祝うパーティー目標に

懐かしい顔ばかりだから夢

(五客)

佳5 間が持たずグラス重ねて悪酔いし

佳4 パーティ中スマホの音も仲間入り

佳3 裏金と刻み込まれたパーティー券

浜知子

堀内きみ子

蔵内歳重

秋田あかり

松谷由夏

林ともこ

三枝なな

武智三成

勘兵衛

青空

秋山加代子

真鍋心平太

浜脇蓬生

佐野正邦

三枝なな

(三才)

佳2 スパークリング一気ひとりのクリスマス

佳1 楽しさのあとの空しさブルトップ

人 たこパーをちよつとおしゃれにするワイン

地 赤い実の暖簾をくぐり鳥パーティ

天 たくさんの冬の光とダンスする

軸 女子が寄るとティーパーティーから始まる

浜知子

林ともこ

秋田あかり

佐野正邦

直子

信子

(選評) なし

訃報

会員の小林満寿夫さんが12月9日に亡くなられました。謹んでご報告致します。

小林満寿夫さんとは弁天町の句会で初めてお会いしました。「抱くことはないが好いてる明太子」などユニークな句を残されました。「川柳タケル」を主宰されており、まだまだ活躍されると思っただけに、突然なことで大変残念です。合唱。

お題 「影絵」

蔵内歳重 選

おなじみのヒチコックですこんばんは

長崎の死者たちが来る影法師

ポーズとる月の明かりのシルエット

モノクロの影絵父いて母がいて

ひとときの夢に浸った影絵劇

夕日背に影絵となつてゆく家並み

狐力タツムリ影絵は遠い思い出に

幻燈に胸躍らせた幼い日

初恋の影絵はいつもサクランボ

夕日浴び木の影踊る障子越し

一コマを影絵にすると美しい

寄り添うてやがて影絵になるふたり

(五客)

佳5 障子越し指が跳ねてる踊ってる

佳4 行き付いでやがて影絵になる二人

佳3 影絵見て昔の夢が走馬灯

真鍋心平太

平川柳

三枝なな

秋田あかり

秋山加代子

秋山加代子

青空

浜脇蓬生

堀内きみ子

佐野正邦

信子

林ともこ

林ともこ

久世高鷲

勘兵衛

(三才)

佳2 人生の苦楽クルクル走馬灯

佳1 本心は影絵だろうか動き出す

井澤壽峰

直子

人 「101歳」生きた証の影絵展

地 雪模様熊の影絵が忍び寄る

天 裏金も影絵のように消えて行く

軸 朝陽さす影絵中亡きポチ駆ける

波部珀兎

武智三成

岩原一角

蔵内歳重

(選評)

人の句

影絵作家の第一人者藤城清治氏の今も活躍中の素晴らしい業績を「生きた証」と賛辞している。メルヘンの世界から戦争や災害にも向き合い、生きる喜びを描いた影絵は最高だ。

地の句

猛暑でどんぐりの生育が悪く、餌不足で町に現れ危害を加えている熊。冬眠もせず空腹のまま彷徨う熊の影絵が障子に映れば怖ろしいことだろう。時宜を得た句だと思う。

天の句

「政治とカネ」の問題が究明されぬままに消えていきそうな現状を「影絵のように消えていく」と憂えている。国民の多数が同様を感じている。

お題 「雑詠」

真鍋心平太 選

みかん剥く今日を後悔せぬように
お役目を終えた紅葉が路を染め
スーパ―入口しめじ一族顔揃え
枯葉いちまい賽銭箱にすべり込む
信頼を貰う努力をした過日

庭坪も有名紅葉引け取らず

温暖化四季が二季へと直ぐ一季

手のひらに喜怒哀楽と書いてみる

鳴き交わすカラスの言葉知らぬだけ

読みかけの本を抱えて早寝する

働いて働いてなどどこか変

くすぐりに弱い男に芯がない

思春期を抜けた息子だ笑ってる

(五客)

佳5 クリスマス今年も来ないウクライナ

佳4 早寝でも夜中に起きて朝寝坊

佳3 忘年会近場持ち寄りでも楽し

佳2 気にかかる爪の伸びいつまで続く

直子

久世高鷲

波部珀兎

浜知子

武智三成

堀内きみ子

加山勝久

東尾由子

三枝なな

浜脇蓬生

信子

山野寿之

秋田あかり

岩原一角

勘兵衛

青空

蔵内歳重

(三才)

佳1 消しゴムの人生だったかもしれぬ

平川柳

人 AIの背後に立っているゾンビ

秋山加代子

地 病褥の母にお返しする介護

井澤壽峰

天 枯葉舞う伝えられないことばかり

直子

軸 まだあるよクレヨンの肩たたき券

真鍋心平太

(選評)

人の句

△はまだ一般に認知されておらず、使う側は無用な不安を抱いている現状をゾンビというユニークな語を使って表現したのが凄い。時事吟はかく詠みたいものだ。

地の句

「病褥」で重い現実を示し、「お返しする介護」に最後の親子の時間の尊さを託した一句。感傷を抑えた言い切りの余韻が胸を刺した。

天の句

「枯葉舞う」という季語的な映像が、心情と重なり合い、「ことばかり」という結びが言えなかった思いの先を想像させさらに余韻を深くする一句になった。

お題 「音色」

互選

1点

銅鐸の音色楽しむ古代人
メイドイン・ジャパン扇子で仰ぐ音
音楽会静かな音にコックリコ
焼く音で国産豪州米国産

全集をめくれば三味の音がする

三重奏ゆつくり聞こう十二月

五人の子音色の違う音符持つ

春の海流れて車中年変わる

午後のティー胎児と聞きしクラシック

習いたてトランペットに気が狂い

美しい音色の燥ぐクリスマス

町じゅうに心浮きたつ太鼓の音

たましいの音色で愛を語る蝶

補聴器で違った音色裏悲し

春を呼ぶ風の音色はオルゴール

フルートの音色冬空透き通る

ヴエオロンの甘い音色を耳朶に抱く

いい声で寒さ楽しむ寒すずめ

コトコト線路の音色心地良い

加山勝久

春田敏晴

青空

春田敏晴

真鍋心平太

信子

山野寿之

三枝なな

松島きよみ

加山勝久

林ともこ

蔵内歳重

平川柳

勘兵衛

山野寿之

浜知子

井澤壽峰

佐野正邦

岩原一角

3点

別れた日風の音色が薄れ行く
チャルメラの音色小腹が空いてくる
優しい声音人柄までも優しい気に

直子

久世高鷺

秋山加代子

秋田あかり

堀内きみ子

岩原一角

松谷由夏

井澤壽峰

浜脇蓬生

平川柳

林ともこ

直子

松島きよみ

浜脇蓬生

堀内きみ子

秋山加代子

真鍋心平太

4点

聖者たち音色途絶えたウクライナ
豆腐屋の笛が聞こえた昭和路地
管弦の音色操る名タクト
美しい音色やつぱり小判かな
雪ん子の白い音色に包まれる
空は春秋の音色になるかえで
あきらめてただしんと雪の音
讃美歌の音色優しくイブの雪
静寂がふと気付かせる雪の音
故郷の音色が匂う宅急便
年輪を重ねて深まりゆく音色
点滴が生きよ生きよと落ちる音

直子

久世高鷺

秋山加代子

秋田あかり

堀内きみ子

岩原一角

松谷由夏

井澤壽峰

浜脇蓬生

平川柳

林ともこ

直子

松島きよみ

浜脇蓬生

堀内きみ子

秋山加代子

真鍋心平太

お題 「寒」短句

互選

1点 木枯らしの音ヒューヒューと鳴る

庭で咲き散る寒椿良し

寒気極まり降雪しきり

起床早める夜半から雪

ジングルベルを聞きつつ献血

日だまり求め寒い日散歩

2点 凍て星みつけほろ酔いの僕

おでん待ってる寒い日の爛

忘れずに来たのは寒気団

雨戸ガタガタ夜寒が迫る

冬の夜空を見上げたため息

灼熱の身に突如冷水

サウナ醍醐味雪原ダイブ

悪寒ぞくぞく玉子酒呑む

寒い冬空星は輝く

寒い一言背中が凍る

エアコンよりもストーブ温い

雪をも溶かす億シーベルト

3点 寒くてもいい深く潜ろう

ぎゅっとマフラー急かす寒空

母の背に重なる寒椿

寒いねとボツケで重ねる手

寒さを耐えて待つ温い春

松谷由夏

加山勝久

井澤壽峰

三枝なな

浜脇蓬生

山野寿之

林ともこ

松谷由夏

信子

三枝なな

久世高鷲

蔵内歳重

松島きよみ

浜知子

東尾由子

堀内きみ子

青空

春田敏晴

直子

林ともこ

秋田あかり

秋田あかり

堀内きみ子

4点

寒風の中愛燃え上がる
寒風に耐え春待つ試練

背筋も凍るオジョーサンの笑み

家路を急ぐ木枯らしの中

プログラミングで鳴る寺の鐘

5点

喪中の友に寒中見舞い

着膨れの子ころげ雪ダルマ

6点

冷えた心で逆転の夢

バレンタインのお返事は雪

空腹に冬眠れない熊

8点

荒れた庭先寒椿咲く

寒波に地震二重の苦難

9点

寒波恐れぬ私の脂肪

10点

寒さ吹き飛び嬉しい便り

久世高鷲

山野寿之

真鍋心平太

浜知子

浜脇蓬生

松島きよみ

平川柳

春田敏晴

直子

蔵内歳重

東尾由子

秋山加代子

波部珀兎

秋山加代子

今月の投句者（26名 敬称略

太字は初参加の方です。）

三枝なな

久世高鷲

井澤壽峰

佐野正邦

信子

加山勝久

勘兵衛

堀内きみ子

山野寿之

岩原一角

平川柳

青空

春田敏晴

東尾由子

松島きよみ

松谷由夏

林ともこ

武智三成

波部珀兎

浜知子

浜脇蓬生

直子

秋田あかり

蔵内歳重

秋山加代子

真鍋心平太

皆様ご参加、ご協力ありがとうございます。

川柳天守閣 連載 評論「現代川柳の詩学」を考える ②
荻原井泉水の「自由律」俳句と井上剣花坊の「川柳民衆
藝術論」

十八世川柳宗家 閑成庵川柳 平川柳（東京川柳会主宰）
剣花坊の「川柳民衆藝術論」にはホイットマン
の「民衆詩」の影響が強くみられますが、勝五郎
の「短詩」にも、こうしたホイットマンの『草の
葉』の影響が強く認められます。

大正八年に剣花坊は『川柳を作る人に』でホイ
ットマンを民衆詩人として取り上げ、「川柳一呼
吸詩論」と「川柳民衆芸術論」を提唱しましたが、
同じ年に俳句の世界でもこの年に自由律俳句作
家の荻原井泉水（一八八四・一九七六）は自由律
おぎわらせいせんすい
俳句誌『層雲』（六月号）で「ホイットマンと芭
蕉」と題するエッセイを発表しています。

剣花坊は一九二〇（大正九）年十一月に発行さ
れた『大正川柳』（百号記念号）で「新川柳に対す
る私の主義主張」を次のように述べています。

「私の主義は、平民主義です。自由主義です。
人間としては（中略）貴賤の差別はない、とい
う簡単な主義です。（中略）私の新川柳に於て
持つてゐる主義が、ヤハリ、この自由主義、平
民主義であつて、私が今日、新川柳どこまでも
最も徹底した民衆芸術にしようという主義が、
決して一朝一夕に生じたものでないことを御
話する必要があると思ふたからです。」

また「最も民衆に近い民衆詩人」の例としてホ
イットマンをあげ、次のように述べています。

「米国のホイットマンは、近世唯一の世界民
衆詩人です。しかし路傍の草の葉にチラチラ
見える花にも大なる愛を持つといふ彼の民衆
に同情ある詩も、彼の如き、大詩人にならな
ければ歌はれません。するとやはり、他の多く
民衆は、この大詩人を待つてはじめて自分を表
現することになるのです。」

剣花坊はこの文で「近世唯一の世界民衆詩人」
であるホイットマンに尊敬の念を示しています

が、「大詩人」がいなければ、自らを表現することができないことに不満をもっています。

● 剣花坊の川柳における「民衆藝術論」の展開

剣花坊は、次のような「民衆藝術論」を展開します。

「民衆は自ら歌ふことができず、歌えば必ず他の大詩人の歌った詩を歌つて満足する、といふのではどうももの足りません。民衆の誰も彼もが悉く詩をつくり、さうして自分のつくつたものを自分で歌ふのが当然だと思ひます。否、それが真に民衆藝術、民衆詩といふものだらうと考へるのです。」

剣花坊は「真の民衆藝術」や「民衆詩」は「民衆の誰も彼もが悉く詩をつくり」、「自分のつくつたものを自分で歌ふ」ものだろうと考えています。

川柳革新運動の第二期である『大正川柳』の時

代の「新川柳」は「大正デモクラシー」と「大正生命主義」の時代思潮が反映されています。

この時代の剣花坊は、明治時代に比べて「古川柳」の理解を深め、一九二六（大正十五）年二月には白石維想楼編で川柳研究叢書第一編として『古川柳真髓』（柳樽寺川柳会発行）を出版しています。

剣花坊は「民衆詩派」の詩人・三石勝五郎からアメリカの民衆詩人ホイットマンの『草の葉』の「民衆詩」を教えられ、「川柳一呼吸詩論」と「川柳民衆藝術論」を展開し、「世界文学」と明治時代の「新川柳」を比較文学の視座から論じます。

この時代に剣花坊は、大正時代の社会の底辺で生きる人々を描いた「社会詠」の「民衆藝術」としての「新川柳」と詩情豊かな「一呼吸詩」としての次の「新川柳」を発表しています。

老車夫の喘ぐ後うしろに昼の月

剣花坊

（続く。）

「肩たたき券」

真鍋心平太

「引き出しの奥を探していたわけでもない。

ふとした拍子に、古い封筒から一枚、色あせた紙切れが滑り落ちた。

赤や青の線がいびつに踊り、角は少し丸くなっている。

「肩たたき券」と、たどたどしい文字で書かれていた。

もう使うことはない。

そう分かっていても、捨てる理由も見当たらない。

この券は、効力を失ったのではなく、役目を終えただけなのだ。

あの頃、肩を叩く小さな手は、カモリズムも覚束なかった。それでも叩かれる側は、妙に誇らしく、そしてくすぐったかった。

券の代価は肩たたきではなく、

その時間、その視線、その一生懸命さだったのだと、今なら分かる。

クレヨンで描かれた線には、迷いがある。

けれど迷いは、真剣さの裏返しでもある。

失敗してもやり直せると信じていた頃の、世界との距離感が、そのまま残っている。

気がつけば、肩を叩く側と叩かれる側は、

静かに入れ替わっている。

それでも、この券は失効しない。

過去から現在へ、無言のまま効き続けている。

引き出しを閉める。券はそこに戻る。

「まだあるよ」と、こちらに言い残すように。

思い出は、使い切るものではない。

しまい直しながら、少しずつ効いてくるものなのだ。

まだあるよクレヨンの肩たたき券

第33回 ウェブ川柳天守閣 ご案内

お題 「ゼロ」 秋田あかり 選
「手袋」 佐野正邦 選
「鼓動」 互 選
「雑詠」 真鍋心平太 選
「霜」(短句) 互 選

(投句 各 2 句)

投句料 3 回につき 1000 円

(請求書メールが届いたらお支払い下さい。)

左記の投句、互選投票、結果発表の閲覧は
下記 URL から可能です。

<https://tensyukaku.com/>

投句、互選投票は会員登録が必要です。

会員登録は下記 URL より

https://tensyukaku.com/id_make.php

スマホは下記 QR コードから

投句開始 2026年1月9日(金) から

投句締切 2026年1月15日(木) まで

互選投票 投句締切後下記の期間内に投票して下さい。

1月16日(日金)～1月19日(月)

披講発表 1月20日(火) から随時閲覧可能になります。



投句・閲覧



会員登録

フォト川柳

クリックで拡大

携帯 080 (2672) 4446
Tel・fax 077 (532) 4211

川柳天守閣

サンルシエル大津607号室

滋賀県大津市逢坂一丁目8-1

TEL 520-0054

(事務所)

(編集人 真鍋心平太)

(発行責任者 真鍋心平太)

ウェブ川柳天守閣会報

二〇二五年十二月二十五日発行